

高岡市埋蔵文化財調査概報第5冊

# 西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報V

1988年3月

高岡市教育委員会

## 序

二上山は高岡市の北部に聳える標高272.7mの丘陵性山地です。この二上山を取り巻くように国指定史跡桜谷1・2号墳をはじめ数多くの古墳が分布しています。またここから南西方、海老坂峠を越え宝達山へと連なる西山丘陵一帯にも、多数の古墳が存在しております。県下でも最大級の古墳分布地帯となっております。

一方この山裾近くを、小矢部川が蛇行して流れ富山湾へ注いでおります。水量豊かで緩やかなこの河川は、古代・中世に国府・守護所が置かれた河口部と内陸部とを水運で結ぶ重要な役割を果してきました。その左岸一帯には、古代・中世を中心に多くの集落跡・遺物散布地が認められ、丘陵部の古墳群とともに、各種の遺跡が複合する地域となっております。

このような重要性を鑑みて、小矢部川左岸、西山丘陵一帯における遺跡分布調査事業を、5箇年間で計画し、実施してまいり、今回がその最終年度に至りました。本年度は二上山南麓一帯が対象となりました。踏査により、多数の古墳群・集落跡を確認・再確認するとともに、城光寺に所在する東上野I古墳群の測量調査を行いました。

この古墳群の前方後円墳である1号墳は、今まで漠然と古墳時代中期の古墳と考えられていましたが、此度の墳丘測量により、桜谷1・2号より遡る、前期に属する古式の前方後円墳と推定されるに至りました。当市域における古墳文化黎明期の歴史を探る意味で、重要な遺跡と言えましょう。

今回の調査におきましても、地元の皆様、関係各位には、多々御協力・御指導をいただきました。厚く感謝の意を申し上げる次第です。

昭和63年3月31日

高岡市教育委員会

教育長 竹下 外男

## 例　　言

1. 本書は、富山県高岡市の西山丘陵に対する埋蔵文化財分布調査の概要報告書である。
2. 本調査は、昭和62年度国庫補助金の交付を受け、高岡市教育委員会が実施した。
3. 現地調査は、昭和62年4月14日から同年12月26日までの実働32日間である。
4. 本調査は、富山考古学会会員西井龍儀氏の指導を受け、高岡市教育委員会社会教育課文化財保護主事山口辰一が担当した。
5. 調査事務は、高岡市教育委員会社会教育課文化係長河合甚郎、同主任片折正明が担当し、教
- 育委員会参事・社会教育課長熊本史郎が統括した。
6. 東上野I古墳群の調査に当たっては、地権者山本源正氏の了承をいただき、地元の工賀一氏にはいろいろ協力をいただいた。この場で厚くお礼申し上げる。
7. 現地調査及び報告書作成に当たって、高岡市文化財審議委員占岡英明氏、富山大学人文学部助教授宇野隆夫氏から、指導・助言を賜った。
8. 本書の執筆は山口が担当した。

## 目 次

序  
例 言  
目 次

I 序 説 .....	1
II 集落跡・散布地 .....	3
1. 概観 .....	3
2. 各遺跡の様相 .....	3
3. 遺物 .....	6
III 古墳群 .....	8
1. 概観 .....	8
2. 各古墳群の様相 .....	8
3. 東上野 I 古墳群 .....	13
IV 国吉・守山地区 .....	19
1. 概観 .....	19
2. 各遺跡の様相 .....	19
V 結 語 .....	23

## 調査参加者名簿

## 現地調査

上田順子、小熊冷子、工幸子、船木悦子、松井弘子、宮下真知子、向しみ子、村上英貴子

## 報告書作成

上田順子、新田貴子、船木悦子、宮下真知子

## 図 版 目 次

図版 1 遺跡	1. 調査対象地全景、小矢部川より上山を望む（南東）	3. 院内古墳群B支群近景（南）	
	2. 調査対象地西部全景（南）	図版 6 遺跡	1. 城光寺古墳群A支群遠景（西）
	3. 調査対象地東部全景（南）	2. 城光寺古墳群C支群近景（南）	
図版 2 遺跡	1. 城光寺遺跡遠景（北東）	3. 東上野II古墳群遠景（北西）	
	2. 城光寺遺跡遠景（南）	図版 7 遺跡	1. 東上野I古墳群遠景（南東）
	3. 守山城跡遠景（南西）	2. 東上野I古墳群、1号墳前方部、後円部より前方部を望む（北東）	
図版 3 遺跡	1. 東海老坂ティラ古墳群遠景（南東）	3. 東上野I古墳群、1号墳前方部南東側面（東）	
	2. 二上古墳群遠景（南）	図版 8 遺跡	1. 東上野I古墳群、1号墳後円部（東）
	3. 二上古墳群遠景（南西）	2. 東上野I古墳群、1号墳後円部北西側（南西）	
図版 4 遺跡	1. 谷内古墳群遠景（南西）	3. 東上野I古墳群、3号墳（南）	
	2. 谷内古墳群遠景（西）		
	3. 鳥越古墳群A支群近景（南東）		
図版 5 遺跡	1. 鳥越古墳群C支群近景（南東）		
	2. 院内古墳群A支群近景（南東）		

## 挿 図 目 次

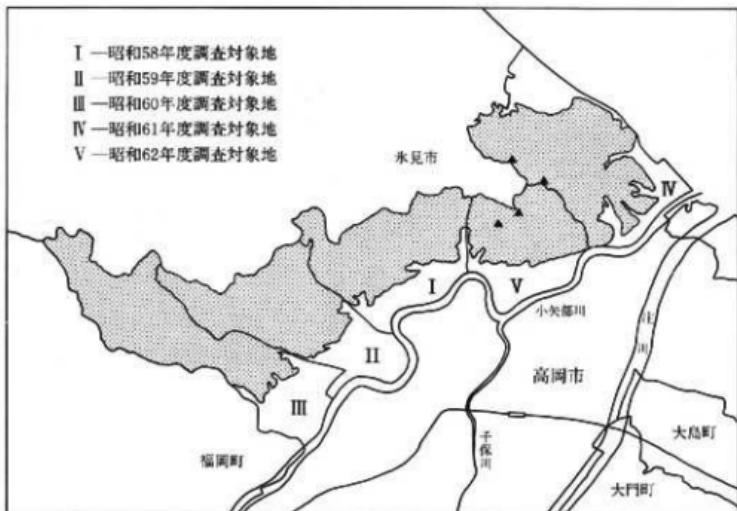
第1図	調査対象地区分図(1/15万).....	1
第2図	調査対象地位置図(1/7万5千).....	2
第3図	集落跡・散布地分布図(1)(1/1万5千).....	4
第4図	集落跡・散布地分布図(2)(1/17万5千).....	5
第5図	土器実測図(1/3) .....	7
第6図	古墳群分布図(1)(1/1万5千).....	10
第7図	古墳群分布図(2)(1/1万5千).....	11
第8図	東上野I古墳群測量風景.....	13
第9図	東上野I古墳群位図(1/5,000) .....	14
第10図	東上野I古墳群墳丘断面図(1)(1/300) .....	15
第11図	東上野I古墳群墳丘測量図(1/300) .....	16
第12図	東上野I古墳群墳丘断面図(2)(1/300) .....	17
第13図	東上野I古墳群1号墳墳丘想定図(1/300) .....	18
第14図	国吉・守山地区遺跡地図(1)(1/1万5千) .....	20
第15図	国吉・守山地区遺跡地図(2)(1/1万5千) .....	21

## I 序 説

西山丘陵埋蔵文化財分布調査事業の対象地は、高岡市の西部の丘陵地とその山麓一帯である。小矢部川は蛇行して富山湾へと注いでいるが、この川の下流域左岸地域である。南側は福岡町となり、西側は氷見市へと連なる山地となる。

この対象地を、主要道路を基準に便宜上5つの地域に区分して、調査を実施してきた。1年度に1箇所行い、5年度目の本年度はその最後の調査である。高岡市から氷見市へ向う主要道路である国道160号線は、いわゆる海老坂越えのルートであるが、昭和58~60年度においては、この160号線の南側、福岡町との市境までを対象として行った。また昭和61年度には、一番北側の二上山北麓・東麓、太田・伏木地区をその対象とした。そして本年度はこの間の二上地区と守山地区の一部を対象とすることに至った。二上山の南麓一帯で、伏木の南西側の城光寺より東海老坂・守山までである。

今回の対象地区は、面積約800haを計る。北側は二上丘陵の山地となる。この丘陵を刻むように数状の開析谷が見られる。また南側は小矢部川の沖積地となる。分布調査の実施においては、4・5月に平野部における踏査を行い、11・12月は丘陵部の古墳を主とした踏査を行った。また、



第1図 調査対象地区分図 (1/15万)



第2図 調査対象地位置図 (1/7万5千)

東上野I古墳群の測量調査も行った。以下、II—集落跡・散布地、III—古墳群に分けて結果を報告する。

今回で一応事業の終了となるが、昭和58年度の報告書に若干の誤りがあったので、本書「IV」で併せて補正を加えた。

## II 集落跡・散布地

### 1. 概観

今回の調査対象地の遺跡に関する基本資料は、他の地区同様『富山県遺跡地図』（富山県教育委員会、昭和47年3月発行）である。ここには、集落跡・遺物散布地として、城光寺平子遺跡、城光寺表上野遺跡、城光寺上野遺跡、城光寺遺跡、高美町遺跡の5箇所の地点が掲げられている。いずれも調査対象地の北東部、城光寺地区に所在している。城光寺地区は、墓地公園、運動公園、土砂採取、住宅団地造成等、近年開発が最も進んだ地区の一つであり、こうした要因で遺跡の存在が確認された場合が多い。上記の5遺跡は、城光寺遺跡が開析谷の谷奥に位置しているのに対し、他の遺跡は、小矢部川や沖積地を臨む、丘陵の先端・台地上に立地している。

集落跡・遺物散布地の主要対象地は、山麓・開析谷・沖積地であり、今回それだけで遺物が採集できた。この地点は第3・4図の地図にドットして示した。遺物が比較的集中して採集された地点が5箇所あり、これを遺跡とみなしつりに現在の地名を付して遺跡名とした。仮称上二上遺跡、仮称上二上東遺跡、仮称谷内遺跡、仮称守護町遺跡、仮称山園町遺跡とした4箇所である。

今回の範囲の東端は、高美町までであるが、若干東側へ踏査の足を延ばし、昨年度不十分であった伏木矢田地区の分布調査を行った。その結果、伏木矢田神社の北西側の台地上に、遺物が散布していることを確認した。

### 2. 各遺跡の様相

#### 1. 仮称上二上遺跡（第3図）

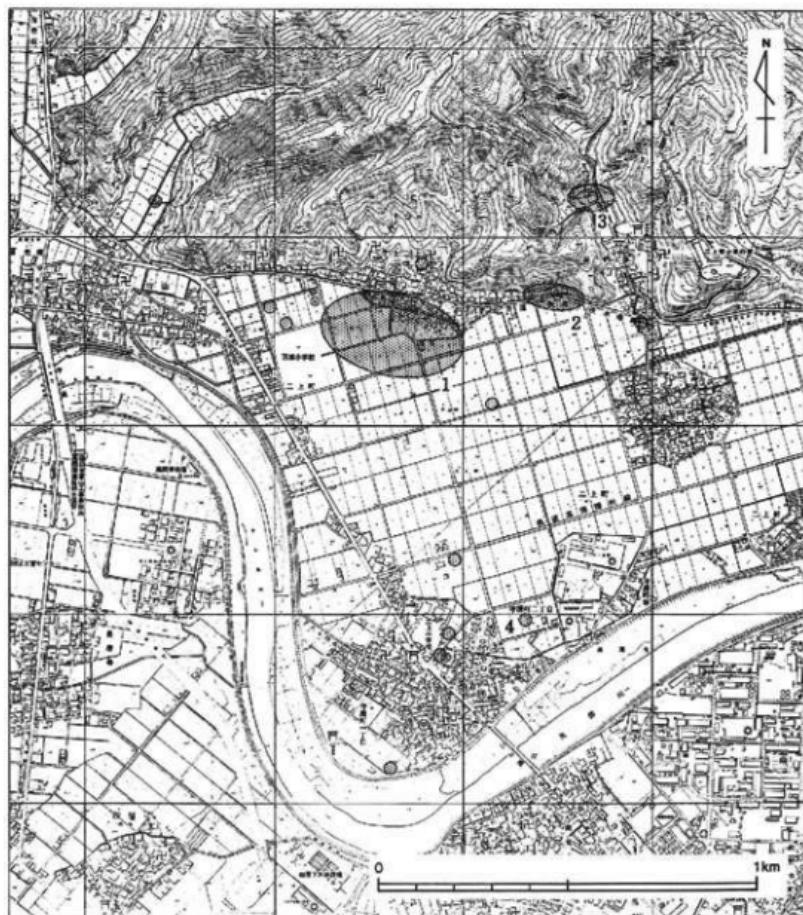
二上丘陵に近い平野部に位置している。丘陵裾部を東西に走る、主要地方道小矢部伏木港線の南側一帯で、現在の上二上集落の南半部から水田地帯にかけてである。標高約8mを計る。遺物が集中して採集された部分を一応の遺跡の範囲とし、南北230m×東西380mとしておく。また附近の水田よりも、遺物が散発的に採集されている。現況は、宅地・畑地・水田である。採集された遺物は、土師器・須恵器・珠洲である。

#### 2. 仮称上二上東遺跡（第3図）

二上丘陵の裾部に位置している。現在の上二上集落の東端部である。標高約9mを計る。遺物が採集された地点より、遺跡の範囲を、南北70m×東西160mとしておく。現況は、宅地・畑地・水川である。採集された遺物は、土師器・須恵器・珠洲である。谷内谷の西方、淨ヶ谷内と呼ばれているので、淨ヶ谷内遺跡と命名してもよかろう。

### 3. 仮称谷内遺跡（第3図）

射水神社のある谷内谷の奥まった部分で、大杉神社の裏手一帯である。以前より土器の散布は知られており、「二上の歴史」でも指摘されている。約100m×50mの範囲で、標高は9~16mを計る。現況は、宅地・水田・畑地である。今回の踏査でも、土師器・須恵器・珠洲が採集できた。



第3図 集落跡・散布地分布図〔1〕(1/1万5千)

1. 仮称上二上遺跡、2. 仮称上二上東遺跡、3. 仮称谷内遺跡、4. 仮称守護町遺跡



第4図 集落跡・散布地分布図〔2〕(1/1万5千)

- 5. 仮称山園町遺跡,
- 6. 城光寺平子遺跡,
- 7. 城光寺表上野遺跡,
- 8. 城光寺上野遺跡,
- 9. 城光寺遺跡,
- 10. 高美町遺跡,

#### 4. 仮称守護町遺跡（第3図）

小矢部川に近い平野部である。標高約4mを計る。守護町1丁目・2丁目の宅地内や附近の水田より、散発的ではあるが遺物が採集されている。宅地化しているため遺跡の範囲等を推定するまでに至っていないが、一応遺跡地として掲げておく。採集された遺物は、土師器・須恵器・珠洲である。

#### 5. 仮称山園町遺跡（第4図）

二上丘陵の末端部に囲まれた狭隘な谷部である。現在宅地化され山園町となっている地区で、元院内と呼ばれていた谷部である。標高約10mを計る。現在市営住宅を中心とした宅地となっている。この谷部全体が遺跡と判断される。南北300m×東西200mぐらいを計る。採集された遺物は、土師器・須恵器・珠洲である。

#### 6. 城光寺平子遺跡（第4図、県遺跡番号No104）

二上丘陵の末端部に位置する。現在は二上靈園と称する標高約40m計る墓地公園となっている。昭和40年頃、二上靈園造営に当たり破壊された。その折、縄文土器・土師器が採集されている。

#### 7. 城光寺表上野遺跡（第4図、県遺跡番号No103）

主要地方道小矢部伏木港線を北折して城光寺運動公園へ向う北東角に、遺物が散布している地点がある。約30m×30mの範囲である。この付近は土砂採掘が進み、各種の施設が建築され、原地形が損なわれているが、この地点のみ二上丘陵先端部としての原地形が辛うじて残されているものと考えられる。標高は約10mを計る。遺物は、縄文時代中期の土器を中心に、土師器・須恵器である。一方こより東側一帯は、城光寺表上野遺跡と称されてきた地区と推定され、現在遺物が分布している部分もこの遺跡に含めておく。城光寺表上野遺跡は、約100m×50mの範囲で、昭和38年富山新港の埋め立て用土砂の採土に当たられ、台地ごと消滅したとされている。出土遺物は、縄文時代の土器（中期・晚期）・石器・土師器・須恵器である。

#### 8. 城光寺上野遺跡（第4図、県遺跡番号No102）

小矢部川に臨む標高20m弱の台地上。縄文時代の土器・石器が出土したとされている。

#### 9. 城光寺遺跡（第4図、県遺跡番号No106）

城光寺の細長い谷間に位置する。城光寺谷の奥まった所で、城光寺陸上競技場の背後に当たる。標高約16mを計り現況は水田である。かって道路工事の際、土器が出土したとされている。これは、2個の土師器壺であり、古墳時代のものである。今回の踏査においては、約50mぐらゐの範囲より、土師器・須恵器が採集できた。以前の出土地との関係を明示し得ないが、近接地と判断されるので、同一の遺跡としておく。

#### 10. 高美町遺跡（第4図、県遺跡番号No101）

二上丘陵の南東端で、小矢部川に臨む標高約10mの台地上に位置する。縄文土器を中心に土師器も出土したとされるが、台地が土砂採掘のため削平され、残存していない。

### 3. 遺 物

今回の分布調査において採集した遺物の内、主なるものを第5図に示した。すべて土器・陶器類である。出土地点は以下の通りである。

仮称上二上遺跡……14・19・20・22・25・26 仮称山園町遺跡……11・21・23・24

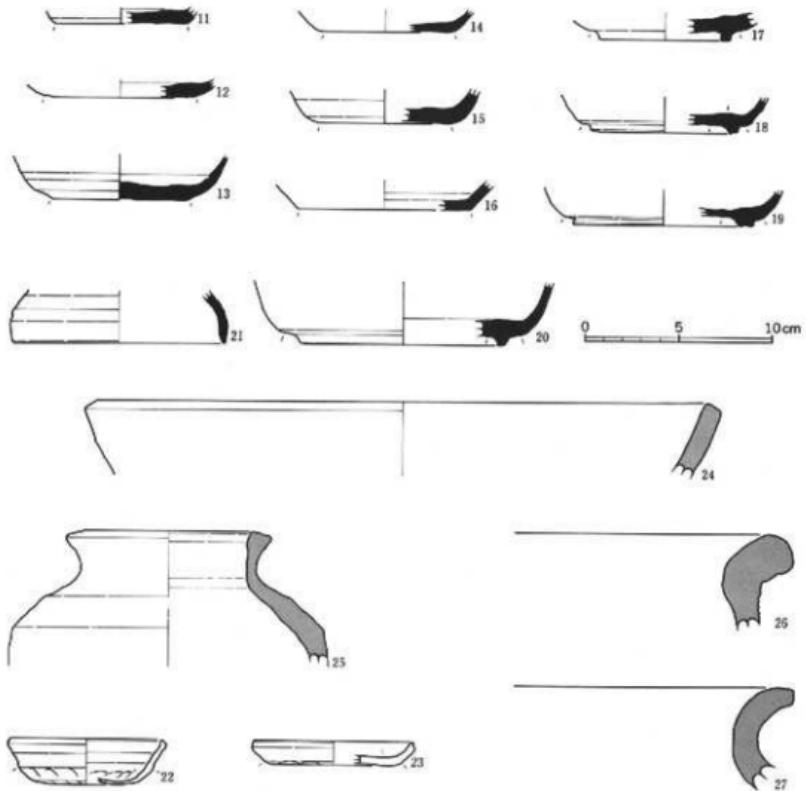
仮称上二上東遺跡……18・27 城光寺遺跡……13

仮称守護町遺跡……17

伏木欠川地内……12・15・16

各土器の内容は次の通りである。

土師器 22・23で2点とも小皿で、鎌倉時代以降のものである。非ロクロの製品で、体下・底



第5図 土器実測図 (1/3)

部の外面は、指圧・ナデである。

須恵器 11~21, 21が蓋である以外、杯である。杯は高台の付かないものの11~16の6点と、高台付杯の17~20の4点に2区分される。高台の付かない杯は、平底で底部はヘラ切りされている。高台付杯も確認できるものはヘラ切りとなっている。これらの杯は奈良時代~平安時代前期のものである。21は蓋であるが、細片であることもあり、古墳時代の杯蓋か奈良時代以降の壺蓋か不明である。

珠洲 24~27、鉢24、壺25、甕26・27である。24は小破片のためかオロシ目を確認できない。25は小型の壺で、口端部はやや肥厚し、端面は外傾する。

### III 古墳群

#### 1. 概 観

二上山周辺は、多くの古墳群が分布していることで著名である。いずれも丘陵や台地上に立地しているものである。伏木地区の南半部（二上山南東側）も含めて、今回対象とする地域の古墳群は、西は東老海坂ダイラ古墳群から、東は古府古墳群まで13の古墳群が判明している。

明治23年、矢田上野古墳群の11号墳から馬具が出土したのをはじめ、昭和30年代までに丘陵や台地への開発が進んだ二上山南東麓の古墳群が知られていた。古府古墳群、矢田上野古墳群、寺山古墳群である。一方、南麓中央部の谷内古墳群、鳥越古墳群等の存在もすでに指摘されるに至っていた。

その後、昭和55年、西山丘陵に所在する他の古墳群と共に、西井龍儀氏による踏査・研究が行われ、より明確な形態でその存在が広く知れ渡った。昭和57年、城光寺古墳群B支群の調査が実施され、昭和58年にはその報文と共に、西井氏の「二上山周辺の古墳」が発表された。

今回は、これまでの成果の確認を主とした踏査と東上野1古墳群の測量調査を行った。各古墳群の様相については「二上山周辺の古墳」に適確に述べられているので、再録させていただくことにした。ただし若干の加除を行った。

#### 2. 各古墳群の様相

##### 11. 東海老坂ダイラ古墳群（第6図）

通称ダイラ山の屋根西端に径約16mの円墳があり、頂部に盗掘痕らしい凹地を残す。これに統く南斜面にも古墳かと見られるところが2箇所あり、内1箇所は一辺約16mの方台状をなすが城郭の可能性もある。

##### 12. 東海老坂ムカイ古墳群（第6図）

通称ムカイ山の頂部に全長約31m、後方部16×16m、前方部幅11m、後方部高さ2mの前方後方墳状となるところがある。この前面には尾根を3分するような2本の掘り切り溝で区画された郭状造構があり、やや下ったところに平坦に整地された広い面があるので、城郭の可能性が強いが、一応方墳の候補地としてあげておく。

##### 13. 二上古墳群（第6図）

二上山の北側にある尾根上、標高80mから160mの二上経塚までの間に10基の古墳が並ぶ。二上経塚は径約20m、高さ約2.5mで、頂部の平坦面が大きい。周囲には平坦面がめぐらしく溝をもつも

のとみられる。経塚とされているが古墳を再利用したものであろう。二上山周辺の古墳としては最も高い位置にある。ここから約40m下の尾根基部に長さ約18mの前方後方墳1基、方墳4基、さらに少し間隔をおいて径10~15mの円墳4基がある。各古墳は尾根道によって墳裾を削られたり、2分されているが、遺物の発見はない。露頭断面ではブロック状の土による盛土が観察される。

#### 14. 二上横穴墓群（第6図）

金光院の背後で標高40~45mの東斜面に4基の円穴が開口する。このほかにも数基の横穴とみられるところがある。泥岩質の硬い地山に穿たれており、ノミ状工具痕を残す。1基は狭門を残すが他は崩れている。

#### 15. 谷内古墳群（第6図）

射水神社のある谷内谷の西側に続く標高約50m前後の台地上にある古墳群で、台地の東西両端にある大型円墳からそれぞれ派生したように分布する。東側をA支群、西側をB支群とする。

15A. 谷内古墳群A支群 主墳は東西35.5m、南北40m、高さ5m、周囲に2~5mの平坦面をもつ。頂部近くの西側斜面から土師器片を採集している。この古墳に接して2基の低平な円墳がある。また、ここから南へ張り出す丘陵には、先端近くに掘り切り状の大溝があり、丘陵を切断しているが、ここに方墳4基と円墳2基がある。

15B. 谷内古墳群B支群 主墳は径27m、高さ4mで周囲に幅2m前後の周溝がめぐる。墳丘の西側約3分の2が削平され、約2m余りの高さをとどめる。この西側に一边約16m、高さ3mの方墳が接し、北と東側にカギ形に周溝を残す。この古墳も西側が大きく削平されている。ここから西側へのびる稜線上には尾根を切り込むように3基の方墳が並び、さらに円墳1基が続く。上位にある方墳2基は斜面側の側邊が長く、端辺の2倍近くもある。B支群としては円墳2基、方墳6基となり、このほか2箇所に墳丘状の高まりがある。

#### 16. 鳥越古墳群（第6・7図）

「二上青少年の家」がある鳥越台地、及びこれに繋がる尾根上及び丘陵上の古墳群、標高の高い順に、A・B・Cの各支群に分けられる。

16A. 鳥越古墳群A支群 標高75~90mに、円墳2基と方墳1基がある。径15~20m、高さ2~2.5mを計る。

16B. 鳥越古墳群B支群 標高50mの鳥越台地には、かって方墳を含むかなりの古墳があったと伝えるが、現存するのは円墳2基と、同台地西側の墓地内にある方墳状の高まりの2箇所にすぎない。

16C. 鳥越古墳群C支群 鳥越台地から東へ突出する標高27mの丘陵頂部にある。前方後円墳1基と方墳2基である。いずれも小型の古墳である。この丘陵を切断するような掘り切り状の溝があり、中世の城郭遺構との関連を想定した場合、前方後方墳、方墳としたものは基壇状遺構としての可能性もある。



第6図 古墳群分布図(1)(1/1万5千)

11. 東海老坂ゲイラ古墳群、12. 東海老坂ムカイ古墳群、13. 二上古墳群、14. 二上横穴墓群、  
15A. 谷内古墳群A支群、15B. 谷内古墳群B支群、16A. 烏越古墳群A支群、  
16B. 烏越古墳群B支群。



第7図 古墳群分布図(2) (1/1万5千)

16C.鳥越古墳群C支群, 17A.院内古墳群A支群, 17B.院内古墳群B支群,  
18A.城光寺古墳群A支群, 18B.城光寺古墳群B支群, 18C.城光寺古墳群C支群,  
19.寺山古墳群, 20.東上野I古墳群, 21.東上野II古墳群, 22.矢田上野古墳群,

## 17. 院内古墳群（第7図）

二上院内社の背後にある3基の方墳と、西隣りの丘陵頂部の円墳4基で、それぞれA、B支群とする。いずれも山地から突出した標高30m前後の丘陵頂部にあり、一列に並ぶが小規模な古墳ばかりである。

## 18. 城光寺古墳群（第7図）

二上靈園の北側に接する標高90~115mの尾根部分と二上靈園の西端に突出した標高30m前後の丘陵先端にある古墳をまとめて城光寺古墳群とするが、これはさらに3支群に分けられる。

18A. 城光寺古墳群A支群 最高所に位置し、径約36m、高さ4.5mの大型円墳の1号墳と、これに接する径約10m、高さ約1mの2基の円墳のほか、靈園拡張時に消滅した径約17mの円墳からなる。この内1号墳は2段築成とみられ、墳丘の南東斜面から数個体分の土師器片を採集している。

18B. 城光寺古墳群B支群 A支群の東方の尾根上に位置する。以前から高塚、あるいはサンガイ塚とよばれており、円墳3基とみられているが、昭和57年度の調査で、円墳4基であることが判明した。1号墳は主墳で周溝が廻る。東西15m、南北18m、高さ2.8mを計る。2号墳は、径12mで、推定高2mの円墳で、周溝が廻る。3号墳は、東西12m、南北11m、高さ1.2mを計る。4号墳は、墳丘が削平されていたが、調査により径9mの痕跡を検出したので、円墳と認定した。

18C. 城光寺古墳群C支群 二上靈園の西端にある古墳で、A・B支群とは立地レベルが異なり、むしろ二上院内の谷をめぐる古墳群としての見方もできる。円墳1基、方墳2基で遺物の発見はない。

## 19. 寺山古墳群（第7図）

現在の市営城光寺球場から東側の城光寺谷までの間、寺山とよばれる台地に5基以上の古墳が存在したが、土取りにより消滅した。ただ、昭和16年頃の開墾時に出土したと伝える須恵器と直刀があり、須恵器には6世紀前半のほか、6世紀後半と8世紀前半にわたるものがある。

## 20. 東上野I古墳群（第7図）

矢田上野から鉢伏山へ続く標高90~100mの尾根添いに前方後円墳を含む6基の古墳がある。この内、矢田上野に最も近い尾根の末端には、前方後円墳があり、これを挟むように前後には方墳が接する。ここから尾根づたいに80~100mの間隔で3基の円墳があるが、やせ尾根の制約を受け、正円の墳形とはならないものの、大きさは長径約28m、20m、13mと奥へ行くにつれ大きさを減じている。遺物の発見はまだない。各古墳の名称については、前方後円墳を1号墳とし、前・後の方墳を2・3号墳とする。また円墳については、奥へ向って、4・5・6号墳と一応しておく。なお、円墳の4号墳には崩れではいるが、前方部状の高まりがあり、本来前方後円墳であった可能性がある。

## 21. 東上野II古墳群（第7図）

矢田上野台地の西側、小さな谷をはさんで、南北約100m、東西約50mの丘陵上に9基の古墳

がひしめくように存在する。丘陵のほぼ中央にある径約20m、高さ約3mの円墳を中心として、北側に1辺6~10mの方墳が4基南北に連続し、南側には東西方向に4基の円墳が並ぶ。この内東端の円墳は径15m、高さ2mで群中第2番目の規模をもつ。中央の最大規模の円墳にのみ周溝が観察される。北側の方墳はやせ尾根状となる丘陵幅の制約からの形ともみられる。遺物は未発見である。

### 22. 矢田上野古墳群（第7図）

小矢部川に接する矢田上野台地（標高30~35m）にかけて11基以上の古墳が存在したが、近年の土取りと宅地化により、2号墳を残すのみで、他はいずれも消滅している。唯一調査された1号墳は群中最西端の高所にあり、径27m、高さ3.5mの円墳で、ベンガラ敷の礎床と、直刀が検出されている。5世紀後半とみられている。他の古墳については、群中最東端の10号墳のみが方墳で、他は円墳とみられている。4号墳には石室があり、11号墳にも石室があって、ここから、提瓶、長颈壺、高杯のほか馬具類の出土をみている。6世紀後半であろう。

### 23. 古府古墳群

小矢部川河口左岸の伏木台地縁辺に点在した古墳で、横穴式石室を持つ矢田庄古墳のほか、須恵器の出土した古墳、千人塚古墳、群中最も規模の大きい古墳首塚など6基あったとされるが、何れも消滅あるいはその一部を残存するにとどまる。この古墳群から北へやや離れて大塚古墳と呼ばれるところがあるが、旧状は不明である。

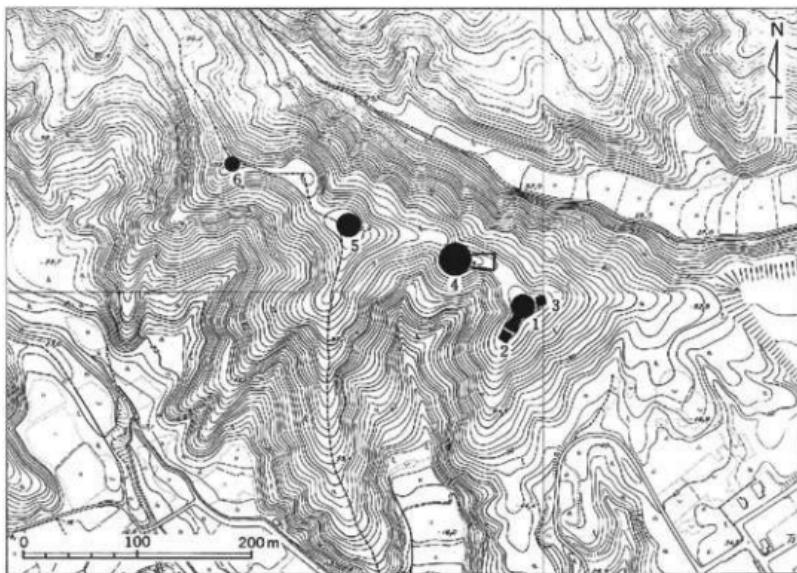
## 3. 東上野Ⅰ古墳群

### 概況

城光寺の集落のある城光寺谷は、西側の西上野台地と東側の東上野台地に挟まれている。東上



第8図 東上野Ⅰ古墳群  
測量風景



第9図 東上野I古墳群位置図(1/5,000)

野台地は開発が進み、高美町と称されている住宅団地となっている。この住宅団地の奥より二上山の主峰の一つである鉢伏山（標高201.3m）へ続く尾根上に、当東上野I古墳群が所在する。この古墳群は、前方後円墳1基、円墳3基、方墳2基の計6基より構成されている。円墳の内1基は前方後円墳になる可能性がある。古墳群は標高85~104mの尾根上に立地している。平野部側に位置しているグループの内、前方後円墳を1号墳、前方部側の方墳を2号墳、後円部側の方墳を3号墳とし、山側の円墳3基については、奥へ向って、4・5・6号墳と命名しておく。今回の分布調査事業の一環として、1~3号墳の測量調査を実施した。25cmセンターで、100分の1の平板測量図を作成した。

#### 1号墳

主軸を尾根方向に取り、南西へ向ける前方後円墳である。N（磁北）-137°-Wを示す。北西方の側部は山側で山頂方向であり、南東方の側部は平野部側で小矢部川を眼下に臨む。前方部は城光寺谷へ向っている。前方部前面は堀を介して2号墳と接している。後円部の東北東側はやや張り出した地形となり3号墳を載せている。この間には尾根道が通っている。

墳形は、比較的急激な立ち上がりを示す後円部より、先端に向って緩やかに下りながら左右に

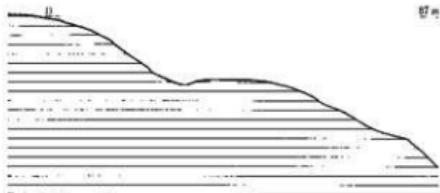
B

87m



D

87m



0 5 10m

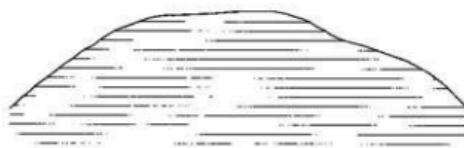
H

87m

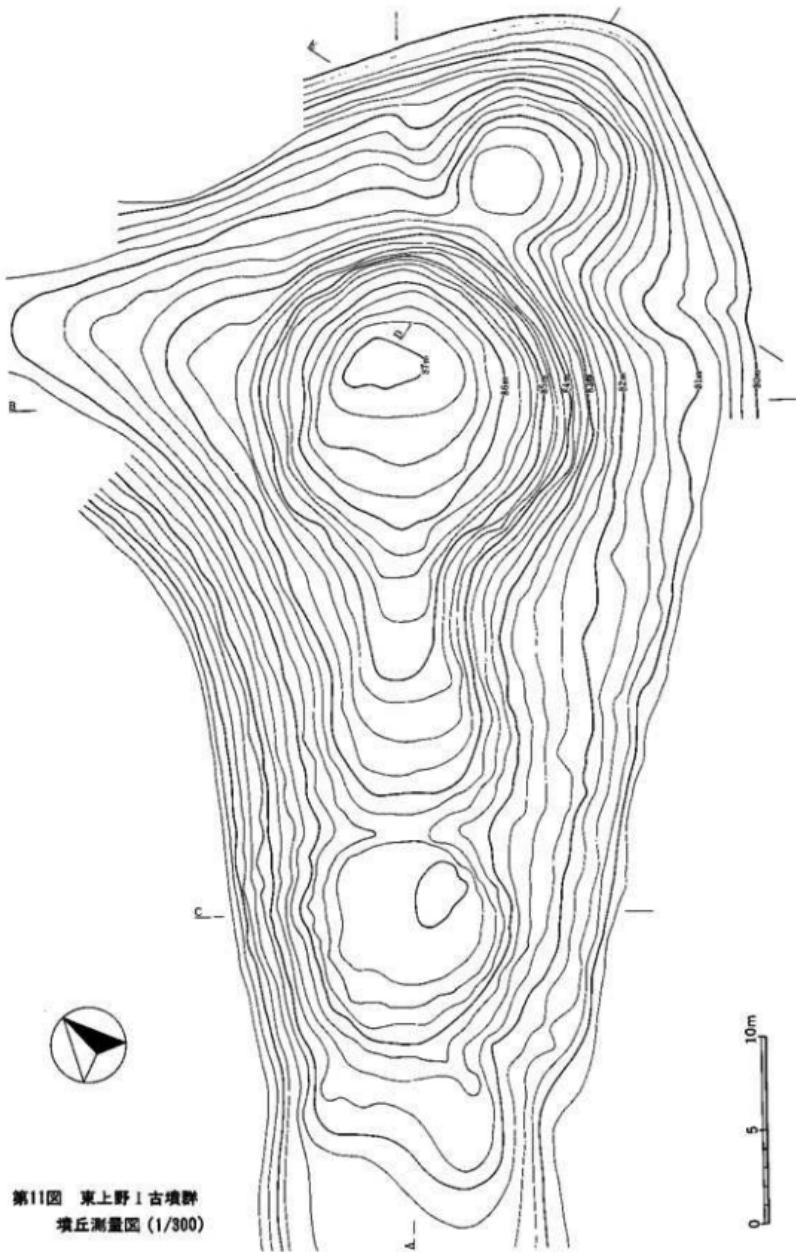


C

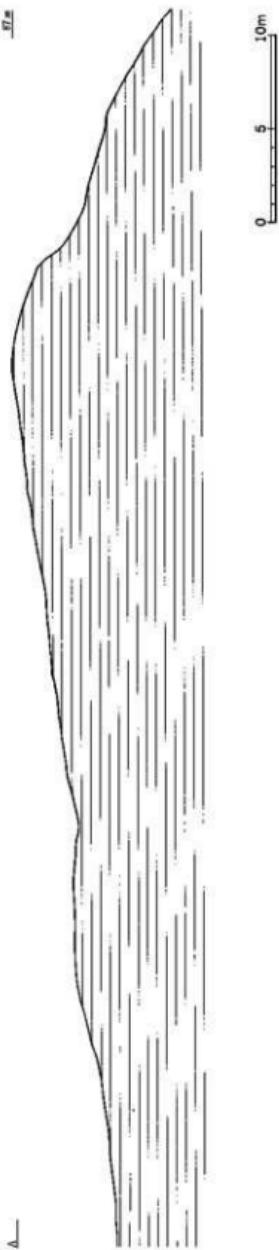
87m



第10図 東上野I 古墳群墳丘断面図〔1〕 (1/300)



第11図 東上野I古墳群  
墳丘測量図 (1/300)



第12図 東上野1古墳断面図 (2) (1/300)

拡がる前方部が付くものとなっている。後円部は尾根筋の頂上を利用していると共に自然地形の制約も受けている。南西側は斜面地であり、平坦な所より墳頂部までの比高差4~4.5mを計る。北西側は頂上へ向う尾根筋であり、比高差約2.5mと低いものである。北東側は墳裾部を尾根道が通るが、これによって墳裾が若干削られている可能性がある。比高差3.5m余りとなる。くびれ部は明確な棱をなさず、なだらかに移行して一旦窄まった後、棱形に緩やかに拡がって行く。前方部前面は、直線的ではなく突出する弓形となっている。前方部の墳形については、左右で違いが見られる。北西側面は、自然の急傾斜を示し、自然の地形のままで人工的の改変がほとんど加えられていないものと判断される。南東側面は、形が整えられ、平坦面が存在しそこから前方部が盛り上がった形状となっている。すなわち、平野部側が整った形を示すのに対し、山側は自然のまま整形がはとんどされていないものと言える。

埴輪・葺石・外護列石等の外表施設は確認できない。また土器の出土も知られていない。

第13図で示したように、測量結果から推定される当古墳の規模、各部の計測値は以下のようになる。

全長；33m

前方部幅；13m

前方部長；13m

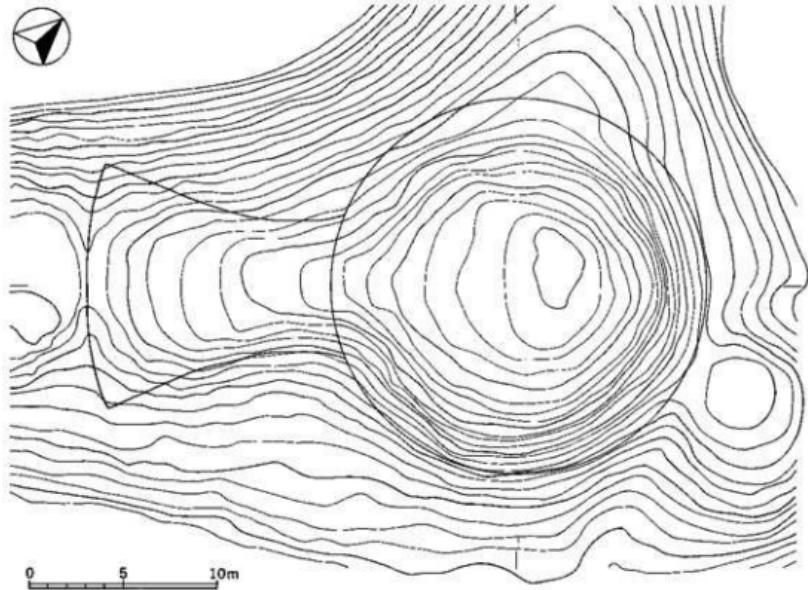
前方部高；2.5m

くびれ部幅；7 m

後円部径；20m

後円部高；4 m

全長では、前方部側は崩の中央を持って取りとした。後円部側は尾根道までは確実に墳丘であると考えた。後円部径については、後方側の尾根道までは確実に墳丘部であると判断し、さらに南東側の平坦部を考慮に入れた。



第13図 東上野I古墳群1号墳埴丘想定図(1/300)

## 2号墳

方墳の2号墳は1号墳の南西側に位置する。1号墳とは堀を介して接している。北西及び北東側は直線的に方墳の形状を示す。南東及び南西側は丸味を持ち円墳に近いものとなっている。山側の南西側は自然の丘陵そのまで、加変は少ないものと思われる。尾根筋の南西側は土砂の流出も考慮しなければならないであろう。墳頂部は平らである。ここでは、円墳になる可能性も考慮しつつ、方墳としておく。規模は1辺11m、高さ1mを計る。なおこの2号墳の南西側も、小古墳があった可能性を示す地形となっている。遺物の出土は知られていない。

## 3号墳

方墳の3号墳は1号墳の東側に位置する。1号墳との間に現在、鉢伏山へ繋がる尾根道が通っている。1号墳の後円部が位置する頂部より、東側へ突き出た尾根を利用している。方墳としたが、丸味を持ち円墳と解釈した方がよいとする見方もある。ここでは一応方墳としておく。各辺は、東西南北にそれぞれ置くものとする。規模は1辺9m、高さ1.5mである。遺物の出土は知られていない。

## IV 国吉・守山地区

### 1. 概 観

昭和58年度の調査対象地は、北はいわゆる海老坂越えの国道160号線から、南は県道触坂高岡線までの間である。守山の大半と国吉の一部が該当している。「西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報1」として報告した以後、機会あるごとに、再踏査や再検討を行った結果、若干修正すべき点が生じてきたので、ここで訂正したい。

板屋から東海老坂にかけて分布する古墳群の内、板屋谷内D古墳群、物部古墳、西海老坂岸ヶ谷内古墳群、五十里殿ヶ谷内古墳群としたものについては、削除したい。これらについては現状では古墳と認定するよりも、自然地形であるとする方がよいと判断したためである。

### 2. 各遺跡の様相

#### 31. 頭川オスキノ原遺跡（第14図、県遺跡番号No139）

標高約110mの緩傾斜の台地上に立地する。縄文時代中期の土器・石器が採集されている。

#### 32. 頭川宮中遺跡（第14図、県遺跡番号No140）

標高約70mの台地上に立地している。縄文時代中期後葉の土器が採集されている。

#### 33. 頭川城ヶ平横穴墓群（第14図）

小矢部川の一支流外古川は、西山丘陵を南東方へ流れ、開析谷を形成し小矢部川に合流する。いわゆる頭川谷である。この谷口の北東側に当横穴墓群が存在する。昭和57年土砂採取中に発見された。昭和57・58年に、一部の横穴の発掘調査と全体の確認調査が行われた。横穴墓は標高21～55mの間の山腹に20基確認されている。この内、3基は工事のため調査以前に消滅したものであり、6基は発掘調査を行ったものである。残り11基は現状保存されている。

#### 34. 板屋谷内A古墳群（第15図）

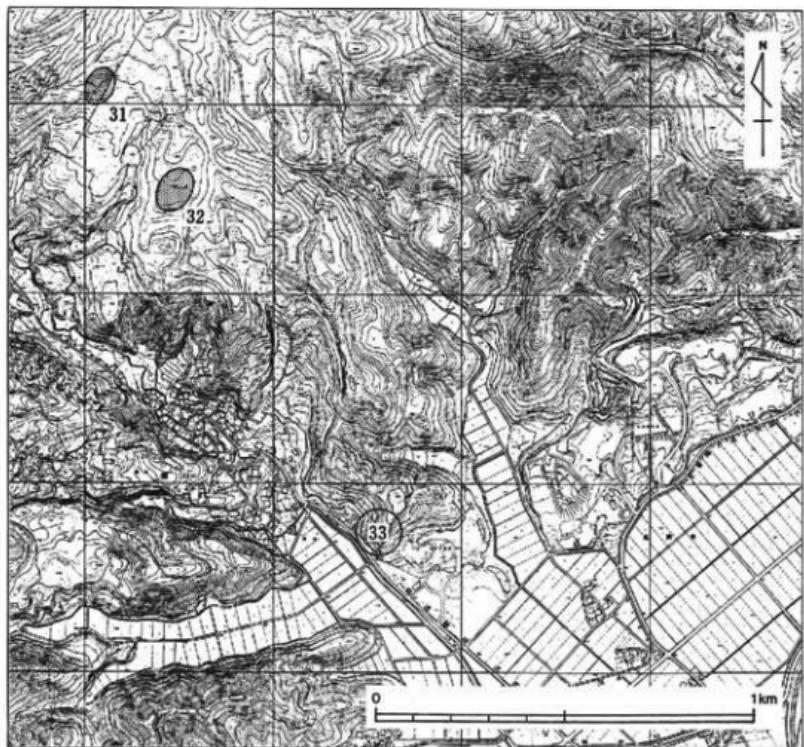
板屋の集落の北側は、西山丘陵から派生した支丘が東西に走っている。この尾根上に3つの古墳群があり、東より西へ、板屋谷内A・B・C古墳群と命名されている。板屋谷内A古墳群は、前方後方墳1基と円墳4基の計5基で構成されている。前方後方墳の1号墳は、他の3基より一段下った標高30mの尾根上に立地する。東側に板屋神明社がある。昭和56年に墳頂への発掘調査が行われ、全長約65m、後方部の長さ約40m、後方部の高さ3.5mで、主軸を北東～南西に向ける古墳であることが判明している。鉄剣1本及び古式土師器が出上している。円墳4基は標高約50mの尾根上に立地し、1基が径約25mとやや大型墳である以外、径8～16mの小円墳である。

### 35. 板屋谷内B古墳群（第15図）

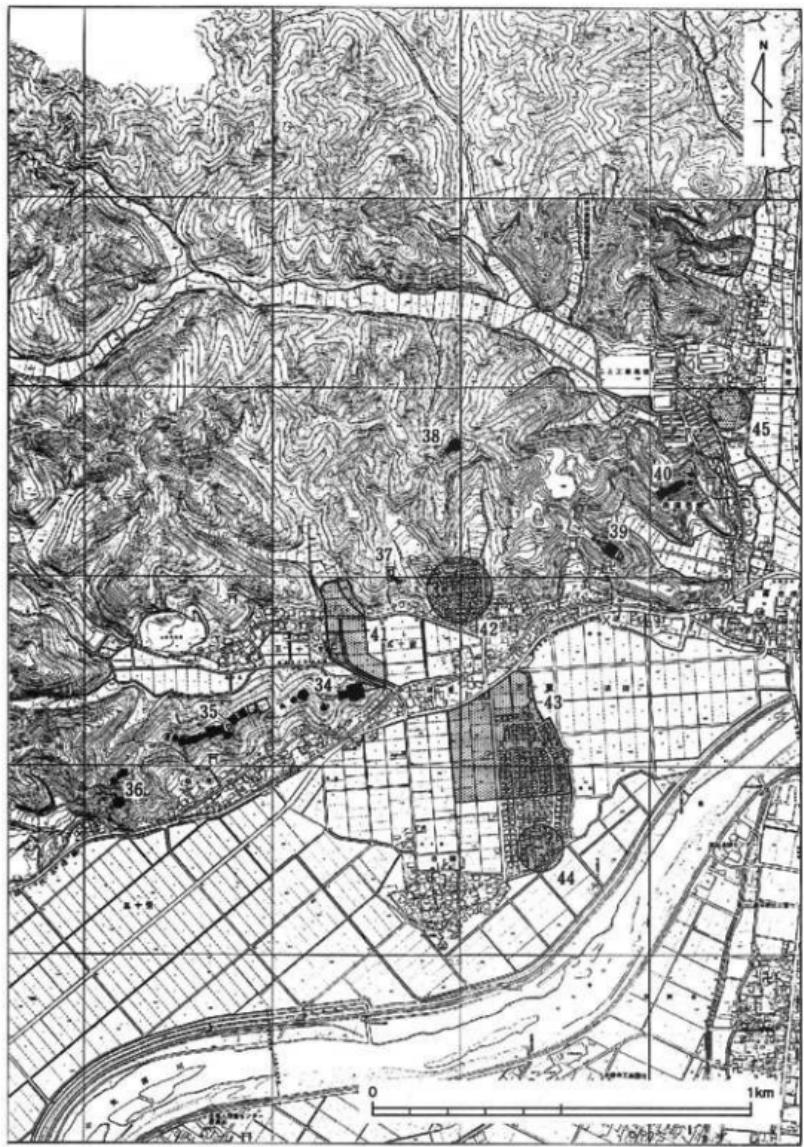
板屋谷内A古墳群に続いて、西へ延びる標高55～60mの尾根上に、15基の古墳が並ぶ。内訳は、方墳7基、円墳8基である。西より東へ、①方墳5基、②円墳1基と方墳2基、③円墳7基と区分できる。ただし、①の内東方より数えて、1・2・5番目の3基は、岩状のテラスになる可能性が強い。

### 36. 板屋谷内C古墳群（第15図）

円墳4基で構成されている。北東～南西へ延びる標高約60mの尾根上に3基がある。そこから南へ張り出す標高約45mの尾根上に1基が立地する。規模は、径22～28m、高さ4mを計り、端整な古墳である。楕円形になり、方墳になる可能性もある。



第14図 国吉・守山地区遺跡地図〔1〕(1/1万5千)



第15図 国吉・守山地区遺跡地図〔2〕(1/1万5千)

### 37. 五十里道神社古墳群（第15図）

道重の集落北側、南側へ向って張り出していく支丘先端の中腹に、式内道神社がある。この神社の裏手、北東側の尾根筋斜面に円墳4基がある。いずれも小古墳である。この内、北端と南端の2基は、明確なものではない。

### 38. 五十里古墳群（第15図）

標高100mの尾根の尖端に前方後円墳状の高まりがある。その前方に円墳状のものが1基ある。また、後円部の後方にも、テラス状のものが見られる。前方後円墳状のものは、全長約43mを計る。この地点は四方へ支丘が延びる基点でもある。ここから派生する支丘上に、後述の須川不動谷内古墳群、西海老坂小田谷内古墳群が立地することもあり、前方後円墳とすれば、これらの古墳群の盟主的なものとの解釈も可能であろう。

### 39. 須田不動谷内古墳群（第15図）

須田の集落の北側、南東側へ派生する支丘の尾根上に3基の古墳がある。南東部の高まりの中央、標高約60mのところに方墳が1基あり、この前後に方墳状の部分が付く。さらに、北西部の一段下ったところに円墳が2基ある。

### 40. 西海老坂小田谷内古墳群（第15図）

西海老坂の集落の北西側、南西～北東へ延びる尾根上に位置する古墳群である。方墳4基、円墳2基で構成され、標高は50～60mを計る。さらにやや下った所にテラス状のものが見られる。方墳は20m前後を計るものを中心である。

### 41. 仮称五十里西遺跡（第15図）

五十里の集落の東方一帯より、繩文土器・土師器・須恵器・珠洲が採集されている。二上工業高校二上山研究会の成果である。現況は水田で、標高約11mを計る。

### 42. 五十里道重遺跡（第15図、県遺跡番号No108）

標高約20mの谷部に位置している。昭和45年の市営住宅の整地工事中に確認された。須恵器が採取されている。

### 43. 須田墓の木遺跡（第15図、県遺跡番号No109）

標高約10mの沖積地で、自然堤防上に立地している。昭和45年の市営住宅建築に先立ち、一部分の発掘調査が行われた。その結果、土坑・溝・柱穴等が検出された。出土遺物は、土師器・須恵器・土鍤で、時代的には、4世紀と7世紀が中心である。

### 44. 百櫛宮田遺跡（第15図、県遺跡番号No110）

標高約8mの沖積地に位置している。昭和45年に住宅用地として整地中遺物が採集された。繩文時代後・晚期頃の石刀・打製石斧が出土している。

### 45. 仮称東老海坂遺跡（第15図）

二上工業高校の周辺より珠洲が出土することが、二上山研究会により確かめられている。図示した地点はその中心部である。標高約12mを計る。

## V 結語

高岡市の西方に位置する西山丘陵は、さらに西側の宝達山（637m）より派生してきた丘陵であり、海老坂峠の低地帯を越えて、丘陵性山地である二上山へ繋がっている。

昨年度の分布調査は、二上山の北麓・東麓を対象としたものであったのに対し、今年度の調査は南麓を対象とするものである。この結果、確認ないし再確認した遺跡は、集落跡・遺物散布地が11箇所（伏木欠田神社北西側の台地も含む）と古墳群が13箇所（古府古墳群も含む）となった。これ以外に、地点は不明だが、弥生時代後期の土器が出土した二上遺跡（県遺跡番号No107）、二上古墳群の一基に重なる二上経塚（県遺跡番号No85）、二上山の西峰頂上に所在する守山城跡（県遺跡番号No84）が存在する。

守山城跡が所在する山頂は城山と呼ばれ 258.9m を計る。中世の山城で富山平野を一望できる要害の地であり、越中 3 大山城の一つとされている。築造者、築造年は不明ながらも、南北朝時代の存在が史料上に見える。戦国時代には神保氏の居城となり、天正13年（1585年）加賀 2 代藩主前田利長が入城している。その後、元和元年（1615年）廃城に至っている。

この城跡の南西麓、守山一帯は城下町として栄えた所である。この守山山上とされる加賀藩梅鉢紋瓦が「二上の歴史」に示されている。山城と共に中・近世の城下町としての遺跡も注目していかなければならないであろう。

なお、守山城跡以外にも、城砦に関すると思われる堀（濠）やテラスが数箇所で確認できる。谷部・山麓から平野部にかけて、中世土師器・珠洲が分布しており中世遺跡の存在が想定できる。須恵器は奈良時代～平安時代前期のものが中心で、主要な分布地である谷部・山麓にこの時期の遺跡が広範囲に展開してきた様相が想定される。また、丘陵上に多数の古墳群が存在している。これらの古墳群を営んだ人々の集落跡は、現在のところこの時期の遺物の出土が少なく、不均等な状態となっている。古墳群の歴史的意義については、西井龍儀氏が「二上山周辺の古墳」でつとに論じられているのでそれに譲りたいと思う。ただ、正式発掘調査、測量調査が行われたものは、西山丘陵・二上山に分布する他の古墳群と同様、極めて少く、今後の調査研究に負う所が多いと言える。

縄文時代の遺物の出土も城光寺地区を中心に知られており、長い年月に亘って人々の生活・活動がなされて現在に至っていると言える。

東上野 I 古墳群の内、南側の 3 基については、腐食土や落葉が覆うと言う制約された中での調査ではあったが、前期古墳であるとの結論を導いた。前方後円墳の 1 号墳は墳形より、方墳である 2・3 号墳については、この 1 号墳との関連からである。1 号墳は丘陵尾根に立地し、前方部が低く撥形に抜がると言う特徴を有する。前方部先端が高くならない点も注目すべきである。このような点から 4 世紀代でも比較的古く位置付け得るものである。墳形より、大和箸墓古墳、山

城格井大塚山古墳、播磨養久山1号墳にも対比されるべきである。県内では小矢部市谷内16号墳である。前後の方墳2基については、全く懸け離れた時期とするより、1号墳に近い時期とする方が蓋然性が高いであろう。弥生時代にまで溯る可能性も含めて、方形台状墓あるいはその系譜を直接引く方墳としておきたい。東上野I古墳群の位置する所は、後に国府が置かれる伏木台地を眼下に收め、蛇行してきて小矢部川が、最後の屈曲を終え北北東に向きを変えて、河口部に移行する地点である。古代の北陸道は、小矢部川の左岸、宝達山系から西山丘陵そして二上山へと続く丘陵の山麓を通り、国府に達していたとされる。そしてこの付近には亘理駅が置かれたとされる。このように交通の要処を把握する形で位置しており、その重要性が十分窺えるものとなっている。

今回をもって5箇年に亘った「西山丘陵埋蔵文化財分布調査事業」を一まず終えることになったが、不十分な点も多く、今後いろいろな形に補って行きたいと思う。

#### 参考文献

- 大野文輝他 1984 「富山県高岡市西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅰ」 高岡市教育委員会  
高岡紹他 1988 「二上山研究会研究紀要昭和62年度」 富山県立二上工業高等学校二上山研究会  
橋康太郎他 1978 「守山小学校百年史」 高岡市守山小学校  
豊島耕他 1978 「二上山の歴史」 二上郷土誌編纂委員会  
西井龍儀 1983 「二上山周辺の古墳」『昭和57年度高岡市埋蔵文化財調査概報』 高岡市教育委員会  
藤田富士夫 1983 「日本の古代遺跡13 富山」 保育社  
古賀英明 1972 「古墳時代」『富山県史 考古編』 富山県  
古賀英明 1972 「穴田上野古墳群」『富山県史 考古編』 富山県  
逸見護 1983 「昭和57年度高岡市埋蔵文化財調査概報」 高岡市教育委員会  
逸見護他 1983 「富山県高岡市頭川城ヶ平横穴墓群第1次緊急発掘調査概報」 高岡市教育委員会  
逸見護他 1984 「富山県高岡市頭川城ヶ平横穴墓群第2次発掘調査報告」 高岡市教育委員会  
和田一郎 1959 「高岡市史」上巻 青林書院新社



1. 調査対象地全景、小  
矢部川より二上山を望  
む（南東）



2. 調査対象地西部全景  
(南)



3. 調査対象地東部全景  
(南)



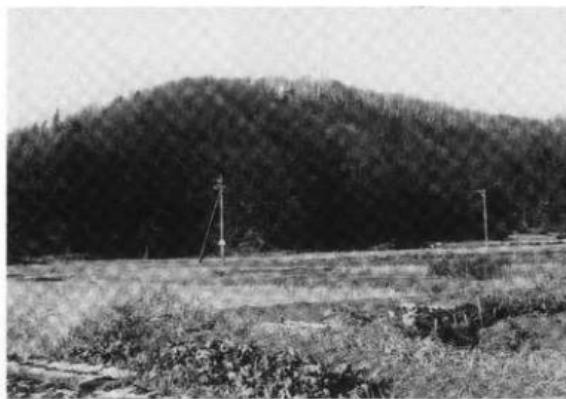
1. 城光寺遺跡遠景  
(北東)



2. 城光寺遺跡遠景  
(南)



3. 守山城跡遠景  
(南西)



1. 東海老坂グイラ古墳群遠景（南東）



2. 二上古墳群遠景（南）



3. 二上古墳群遠景（南西）



1. 谷内古墳群遠景  
(南西)



2. 谷内古墳群遠景  
(西)



3. 鳥越古墳群A支群近景  
(南東)



1. 島越古墳群C支群近景（南東）



2. 院内古墳群A支群近景（南東）



3. 院内古墳群B支群近景（南）



1. 城光寺古墳群A支群  
遠景（西）



2. 城光寺古墳群C支群  
近景（南）



2. 東上野Ⅱ古墳群遠景  
(北西)



1. 東上野I 古墳群遠景  
(南東)



2. 東上野I 古墳群、1  
号墳前方部、後円部よ  
り前方部を望む（北東）



3. 東上野I 古墳群、1  
号墳前方部南東側面  
(東)



1. 東上野I古墳群、1号墳後円部（東）



2. 東上野I古墳群、1号墳後円部北西側  
(西北)



3. 東上野I古墳群、3号墳（南）

---

高岡市埋蔵文化財調査概報第5集

西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報V

発行者 高岡市教育委員会

1988年3月31日

富山県高岡市庄小路7-50

印刷所 小間印刷株式会社

富山県高岡市利屋町3

---